



居酒屋経営の日常

松尾康範 / まつお・やすのり
酒肴工房 百年の杜 店主、アジア農民交流センター (AFEC) 事務局長

小さな居酒屋を運営して3年の月日が経つ。仕入れと仕込みを終えて店は15時から開け、お客さんが来るまでの時間帯はたいてい読書タイムとなる。

アジア農民交流センター共同代表の菅野芳秀が、『玉子と土とのち』(創森社)を出版したので、それを読みたいがために仕込みのペースがあがった。ある週の平日のこと。早い時間に1人で来られる常連さんがポツポツと来ながら、肝心の金曜日になかなかお客さんが入って来ない……。おかげで読書に集中。やがて本は最終章に。玉子を地域で初めて販売しはじめた奮闘記が描写されていた。

これまで、オンドリの老境、山の神様、外敵との格闘……。と興味深い話が続いたが、この玉子販売の項からグッと物語の中に引きずり込まれた。ケージ飼いの鶏の話は現代社会全体の問題になぞられたが、玉子販売の苦労話は今の自分自身の心境そのものに重複した。やがて2人のお客さんが入ってきたので読書タイムは終了。その日は月末の金曜日だというのに結局お客さんは4人だけ……。なぜ？

自分の価値が認められていないようで正直落ち込んだ。明けて土曜日。仕込みを早めに終えて読書タイム!! ハリーナ読者もよく知る山形県長井市の生ごみ堆肥化事業「レインボープラン」。「タスキ渡し」、そして沖縄の話へ。読みながら身体が熱くなった。毎日お店を運営するという単調な生活では、自分の持った志を忘れてしまふことが多々あるが、この本を読み終え、沢山の力が甦ってきた。さあやるぞ!! すると16時頃に扉が開いた。「5人ですけど」。そこからは大パニック!! アツという間に店は満席となり、何組ものお客を断り(なぜ昨日来なかったのか!)、24時まで仕事は途切れなく続いた。菅野農園の玉子を使った柳川風「アナゴの玉子とじ」も好評だった。

大手居酒屋激安競争……。それを支える低賃金非正規労働者や輸入食材……。いま居酒屋産業は激変している。庶民の癒しの場となる居酒屋は、その舞台も庶民が創ったものでなければならぬ。そんな信念を持ってお客さんとのない会話を楽しんでいる。

「ポコポコ」は「サンゴ礁の満潮」をイメージしています。潮が満ちていくにつれ、サンゴ礁のあちこちに「ポコ」(水たまり)が現れて、ポコポコ同士がつながり始め、いつのまにか一面海になるというイメージです。アジアの各地域で「ポコ」が生まれ、気がつけばつながっているような活動をしていきたいという思いがこめられています。

CONTENTS ■ HALINA 10 2010.11.01

- 02 Relay Essay ポコポコ⑩ 居酒屋経営の日常◎松尾康範
- 03 **特集** 成長をやめてみたらどうだろう
〈脱成長〉—新しい社会正義の実現へ向けて◎中野佳裕
レポーター
東北タイの村びとたちがつくる「思いやる地域」◎森本薫子
杉並区・高円寺にみる「脱成長」の空間◎堀芳枝
- 08 **Topics**
東ティモール、コーヒー収穫体験記◎野川未央
GM作物、「アフリカに売り込め」 ヒル・ゲイツ財団が大活躍◎天笠啓祐
- 10 **Column**
しらかが便り④ 古のコミュニケーション・石文体験◎紺野信吾
むらさき歩⑩ けものに追われる山間地農業◎大野和興
まだまだ韓流④ 韓国史上最高の英雄の生涯を描いた『不滅の李舜臣』◎中島 恵
Have you ever seen the Cinema?④ 『長江哀歌(エレジー)』◎重政栄一郎
- 12 撮っておきアジア⑩ 沖縄県八重山郡◎若井俊宏&恵美子
- 13 APLA生活⑩ コーヒー 焙煎ロースター・コーヒーモルティブ下北沢さん◎吉澤真満子
- 14 **Voice from APLA partners**
【東ティモールより】経験共有ワークショップを実施、10地域から23人が参加しました。
【インドネシアより】ATINA社労働者調査・現地報告会
- 15 事務局便り

表紙のことば

いわゆる「途上国」の保健衛生問題に関心のあった学生時代、ゼミの先生の紹介で、アジア・アフリカの国々で保健問題に取り組んでいるNGOのカンボジアの現場を訪問した。村の人の家に泊めてもらう前に、市場に行ってプリント柄の布を選び、水浴びなどの際に使うスカートを作ってもらった。布を筒状にして、片一方にゴムを入れてもらうだけなのだが、その布を着用して(スカートを上まで引き上げて)着替えなどができる優れもの。しかしそのような形での着替えの経験がなく、「とりえず長い方が隠れていいだろう」という考えのもと、仕立てたスカートはロングスカートに近いもの。ところが、いざ着替えるとなるとこの長さが邪魔になる。もそもそももそも、上手く身動きが取れない。希望の長さを聞いてきた市場の人が怪訝そうにしていた意味が、その時ようやくわかったのだ。 (赤松結希)

特集

成長をやめてみたらどうだろう

役人や政治家や経済界の人たちは、相変わらず成長戦略を叫んでいる。成長のない世界など考えられないようだ。その結果が、この「現にある世界」だとすると、そんなにいいものとも思えない。この頃は、そう考える人が世界中で増えているとも聞く。そんな「脱成長」の潮流を思想と暮らしの現場で追ってみた。(編集部)

〈脱成長〉

—新しい社会正義の実現へ向けて

中野佳裕 / なかのよしひろ
立命館大学客員研究員

去る7月にフランスの経済哲学者セルジュ・ラトゥーシユの著者『経済成長なき社会発展は可能か?』(作品社)という邦題で翻訳出版された。ラトゥーシユは



生産と消費は自分たちの手に。ファーマーズマーケットにて(ニューヨーク)。

1970年代より西洋の経済思想を批判的に検証する研究を続けており、ダグラス・ラミスやヴァンダナ・シヴァらと並んでポスト開発思想の先駆者として国際的にも知られている。ラトゥーシユによれば、西洋近代に誕生した経済発展思想に基づく開発プロジェクトは、脱植民地化したアジア・アフリカ・ラテンアメリカ諸国を欧米諸国と同様の発展経路に乗せようとしたが、実際には、近代化によって南側諸国は土着の文化を破壊され、自立の機会を失った。

いま求められる 〈脱成長〉社会とは

現行の経済体制は途上国の民衆と先進国の民衆の双方の生存を危うくする。世界経済の不平等な構造の中で、途上国の民衆はその労働力を多国籍企業に安く買いたたかれ、森林・鉱物・水などの自然資源も先進国の市場に売られてしまふ。途上国の経済的・政治的自立はますます困難なものとなる。一方で先進国の民衆は、より多く生産・消費・廃棄する消費主義の中で生活している。もし彼らがこの生活様式を続けるとすれば、自

然資源の搾取と経済活動が生み出す汚染などの環境負荷の一層の増加を生み出し、結果的に先進国社会は自らの物質的生活を再生産する生態学的基盤を失ってしまふ。そこでラトウーシユは、先進国が無限の経済成長を求めたことを止め、現行の経済体制とは全く異なった論理の上に成り立つ「脱成長」社会を創造することを主張する。「脱成長」社会は、「豊かさ」に代表される近代社会の様々な価値を転換し、限られた諸個人が富を独占するのではなく、地球上に



『経済成長なき社会発展は可能か? 〈脱成長〉と〈ポスト開発〉の経済学』セルジュ・ラトウーシユ著 中野佳裕訳 作品社 2800円+税

日本独自の「善き社会」を形作る倫理学を

ラトウーシユの思想

暮らすすべての人びとの間で富を分かち合うことができる社会を創ることをめざす。そのために、労働力と自然資源の双方の搾取を止めるような公正な生産関係や生産物を地球規模で確立していくことをめざす。その鍵となるのが、地域社会の自立である。経済活動や政治空間をローカライズし民衆の手で自主管理することで、自律的で多元的な地域社会のネットワークを世界に拡大していくことが重要である。従来のように開発政策を通じて途上国社会をグローバル

の根底には、「批判し、実践し、解放する」というアリストテレス以来のヨーロッパ大陸哲学の伝統的テーマが生き生きと引き継がれている。またそのような哲学的な主題は、「善き社会とは何か」という共通善を求める倫理学と結びついている。つまり、ラトウーシユの「ポスト開発」・「脱成長」論は、近代文明の根本価値のひとつである経済成長主義がもたらす不正義や構造的矛盾を克服するための、新しい社会正義の文法を提供する思想であるといえる。

社会正義を組み立て直す

1960年代以降、開発や経済成長の構造的矛盾をつく社会運動や産業社会に対するオルタナティブを求める社会運動は日本においても多く実践されている。公害反対運動、反原発運動、生活協同組合運動、産直提携運動、フェアトレード、スロービジネス、市民による里山の保全運動、生物多様性を守る運動などがそうである。これらの社会運動のひとつひとつを急進化していくことはもちろん重要であるが、同時に、これらの様々な運動が提供する価値観をつなぎ合わせながら、日本における新しい社会正義の在り方を模索することも必要である。また、平和運動や人権運動にも注目する必要

がある。日本の経済発展が生み出す社会問題は、米軍基地問題、アイヌ民族や沖縄の差別、在日朝鮮・韓国人の差別、部落民の差別、ジェンダー差別やセクシャル・マイノリティの差別など、軍事問題

や人権被害と密接に関連している。日本における脱成長は、民衆の経験から生まれた平和思想や多文化共生の思想とともに発展していかねばならないし、また、平和・人権・多文化共生の意味も脱成長の

視点から再解釈されねばならない。脱成長をキーワードに社会正義を組み立て直すこと——これが今日の日本において私たちが取り組まねばならない課題のひとつである。

て帰るといふ物々交換のような市場だ。朝5時半くらいからちらほらと売る人も買う人も現れて、売り切れた人から帰るといふさやかな市場。ちょっと街まで出れば、タイの中央市場から仕入れてきた様々な野菜や、中国野菜など輸入野菜まで売っている大きな市場がある。でも

レポート Report

経済成長には終わりが無い。常に今より上をめざし、それが永遠に続く。終わりが無い成長って、いったいどこに向って行くのだろう。

森本薫子／もりもと・かおる 東北タイ在住

NGOスタッフとして東北タイで活動し、その後結婚して東北タイの村で暮らしながら、そんなことを考える。

地域の循環を支える村の市場

この村の人たちはほとんど農民なので、自分たちが作った野菜の中で、余ったものを持ってきて、同じ村内の人たちに売り、自分も足りない野菜を買っ

この村の人たちの食生活は、自分と村内の仲間たちが作る農産物と、池の魚、地鶏、森のキノコや竹の子などで事足りるのだ。今では生産者直売の有機市場はタイ国内にはいくつもあ

域経済の循環、地域内の人びとが支えあう関係を重視している。

東北タイの村びとたちがつくる「思いやる地域」



ヤナーン村の朝市。



このヤナーン村に住み、村の朝市が始まったときから協力しているチュアムさんはいつも言う。「経済活動は競争ばかりだ。う。人から、自然から、環境から奪うことばかり。でもこの市場は違う。自然を守り、地域の人びとがお互いを思いやる、与

え合うことばかりなんだ」

経済に振りまわされない生活

経済は成長しなくても、持続的な、幸せな生活を築くことができる。たとえば村の人の生活を見てみると、本当にモノを捨てない。かけた食器、やぶれた布団、色あせた服など、日本人ならとくに捨てているモノも、普通に活躍している。ペットボトルを半分に切って植木鉢代わりするなどのリサイクルの工夫も満載だ。流行おくれだから捨てるのか、人に見られたら恥ずかしいとか、そのような感覚は



村人による野菜市場を訪問する南アの皆さん。

ない。電化製品も何度も修理しながら使う。社会生活を送る上で必要な消費、たとえば祝儀、お香典、お祝い、お寺への寄進など、その人が出せる分だけで充分で、特別な式に出席するときの服装は、自分が持っている中で一番いい服を着ればそれでいい。周りとの基準をそろえることが常識ではない。自分の経済状況に合わせた生活をすればいい。経済に振りまわされない生活は、これらを許す社会である必要がある。

イサーン地方の村では高齢者も多いが、自分の息子や娘の家族と住むのが当たり前で、高齢者施設に入る人はいない。そもそも高齢者施設というものは存在しない。高齢者も孫の世話や牛の世話などで活躍しているの、家族の中では貴重な存在だ。子どもも、小学生の中学年以上にもなれば、小さい子の面倒を本当によくみる。たとえ両親の帰りが遅くても、学校から戻っ

てくる子どもの心配をする必要はない。近所の家で過ごし、ご飯もそこでご馳走になればいいのだから。そういうことも、事前にお願ひする必要はない。村全体がひとつの家族のようなものなのだ。ここでも、お金以外のものが支える生活が実感できる。

国境を越えてつながる

それでも少しずつ都会の状況に近づいているイサーンの村の生活の将来を懸念して、世界の経済状況に左右されない仕組み

を創っていかうと、積極的に活動する人たちがいる。この市場を担う人たちのように。その人々には、同じ志を持った様々な国の人と出会う機会も訪れる。今までに日本、ベトナム、フィリピン、ラオス、南アフリカ……多くの人びとがタイの農民がつくる有機直売市場を訪問してきた。いつか、このような脱・経済成長の取り組みは、国境を越えた活動に発展するのだろうか。思いやる地域をつくる村の小さな取り組みが、世界とながっていく。■

レポート Report

杉並区・高円寺にみる「脱成長」の空間

堀芳枝 / ほりよしえ

恵泉女学園大学 教員

ラトウーシユは、先進国で暮らす私たちが、自分たちのライフスタイルを「脱成長」できるのか、国家や市場に左右されない自律した空間を形成できるのか、という問題を提起した。こ

れはバブルだった20年前ならば、無視できたかもしれない。しかし、日本は長期不況が続くなかで勤労者全般の平均月収が、1997年の59・5万円をピークに落ち込み、2008年は53・4万円(10%減少)である。ワーキング・プアとよばれる年収200万円以下の低所得階層も、2008年の統計では1067万人(全雇用者の23%)となる。これは1996年に発足した橋本内閣が提唱し、2001年に

誕生した小泉内閣が強行した新自由主義を進めるための構造改革の成果である。結果、国内需要が落ち込み、企業は輸出依存体質、産業の空洞化が進展した。加えて2008年世界同時不況と少子高齢化の到来で、高校・大学生の就職が「超氷河期」となったのである。私たちは否応なく「脱成長」に適應し、自分たちの暮らしを工夫して守っていかなくてはならない。

「脱成長」のまち・高円寺

では、どこがいち早く脱成長しているだろうか。ひとつの例として、杉並区・高円寺をあげてみたい。ここは東京の中でも特に独身率が高く、単身世帯用のアパートやマンションが充実している。そのせいか、24時間営業のスーパーや夜中の2時までやっている銭湯、紳士服店もある。駅前の商店街は「巨峰1房280円(デパ地下では580円)、いちご2パック500円(デパ地下では1050円)など、果物、野菜、魚も安く買える。ランチ時は中国人が弁当を1つ300円で叩き売りしている。安い飲み



1つ350円のお弁当。量はしっかりある。



雑貨とリサイクル用品を扱う「素人の乱」5号店。

屋や古着屋も多い。近隣の荻窪や吉祥寺と比較しても、物価が安いのは一目瞭然で、商店街は屋間からお年寄りや、屋間からプラプラしている若者と「推測される」人たちが賑わっている。この職業・年齢ともに不詳な若者の存在と地域の台風の目ともいえる「素人の乱」が、高円寺の活気の原動力に思われる。

若者が創りだす独特な空間

「素人の乱」は松本哉氏(はしもと げい)を中心とした商店の名前で、2005年に高円寺・北中通り商店街に第1号店を出し、古着屋や呑

み屋なども出店し、現在15号店まで店舗を拡大した。この店にかかわっているのは20代から30代の若者たちで、その多くは1990年代に学生時代をすごしたフリーター世代である。彼らは、大企業で働くのではなく、自活の道を模索した人びとである。彼らが有名なのは、DJやパンクバンドの乗ったサウンドカーと一緒に練り歩くお祭り騒ぎ的なデモである。2007年には松本氏が杉並区議長選に立候補し、選挙期間中、高円寺駅前デモや音楽をかけた、賑やかした。こうした空間

が楽しい、と思う若者たちが高円寺に移り住んで「素人の乱」のお店やイベントに出入りしている。筆者はその中のひとり、アメリカ人のJさん(推定34歳)と偶然知り合った。彼は某企業を辞め、現在は翻訳やアルバイトで生活している。3人で1軒家をルームシェアし、「素人の乱」のイベントに参加したり、演劇や映像に興味のある青年たちと映画祭などに力を注いでいる。そこで知り合った友人の引越を手伝い、仕事を紹介してもらいなど、助け合って暮らしている。高収入とはいえず、企業に搾取される低賃金労働者という感じだが、お金がかからない生活を工夫し、生活費を稼ぐ以外の時間を映像や作曲など自分の活動に費やす。楽しそうに自分の時間を悠々と過ごしている彼の姿を見るにつけ、こういうのが「脱成長」なのだろうか、と思う。こうした若者たちの独特な空間づくりやライフスタイルが「脱成長」へ向けた新しいスタイルのひとつとして広がっていくか、注目していきたい。■

東ティモール、コーヒー収穫体験記

野川未央 / のがわ・みお
APLA事務局

6

月末、オルター・トレード・ティモール社（A.T.T.）がコーヒーを買い付けているエルメラ県レテフォホ郡エラウロ村のコーヒー農家に一週間ほどホームステイをさせてもらった。首都デイリから車で3時間ほど。くねくねと続く山道を抜けた道路脇に広がる山間地の村だ。この時期は、コーヒーの収穫シーズン真盛り。例年であれば5月には乾季に入っていて順調にコーヒーの収穫が進んでいるはずだが、「今年みたいな異常気象ははじめてだ」と誰もが口を揃えるように、毎日必ず数時間は雨が降っていた。コーヒーは、熟して真っ赤になった実（チェリー）を摘み取った後、なるべく早く果肉部分を除去し、水につけて発酵させ、ぬめりを水で洗い流したパーチメントと呼ばれる状態で乾燥させる必要がある。しかし、連日の雨のせいでその乾燥作業が思うように進まない。それに加えて、熟したチェリーが雨のせいで地面に落下してしまったり、枝になっ



楽しそうにおしゃべりしながらコーヒーチェリーを摘む。

たまま腐ってしまったり……といった困った状況も。それを避けるためにも、どのコーヒー農家も（例年以上に）可能な限りの労働力を動員して収穫にあたるという様子だった。限られた収入源であるコーヒーなのだから、当然だろう。

お世話になったホストファミリーは、父・アントニオさんが村の小学校の先生であり、家の一角を利用して小さなキオス（日用品の小売店）を営んでもいるため、コーヒーの収穫は主に母・アニタさんと子どもたちの仕事となっている。全部で11人（！）という子どものうち、小学生と中学生である末の2

人をのぞいては、すでに村から出て仕事をしていたり、学校に通っていたりしているのので、アニタさんは近所の子どもたちにも声をかけて収穫を手伝ってもらっている。特に、午前中で授業が終わる小学生たちは、重要な働き手だ。子どもたちもお小遣いを稼ぐいいチャンスなので、進んで手伝っている。「お小遣いで何を買うの？」小学校6年生の女の子たちに、単語を並べただけのテトゥン語で質問してみると、「ロバ（洋服）」と元気な答えが返ってきた。

「イタ・バク・カフェ」（「チーを摘みに行く」）

学校が終わわり、アニタさんが用意してくれていた昼ごはん入りのお鍋やお皿などを持参して、みんなでコーヒー畑に向かう。アニタさんたちのコーヒー畑は、家から30分ほど歩いたところ。山道をのぼり、「森の中」の細い道を進んでいった斜面に広がる。

コーヒーの木が予想以上に背の高いことに驚いたが、アニタさんと子どもたちに要領を教えてもらい、適度になる枝を自分の方に引き寄せ続けながら、上を向いた状態でチェリーを摘む。同じ枝でも日当たりなどによって実が熟れる度合いにズレがあり、未熟で緑色のものやすでに熟しきってしまった

GM作物、「アフリカに売り込め」ビル・ゲイツ財団が大活躍

天笠啓祐 / あまがさ・けいすけ
科学ジャーナリスト、市民バイオテクノロジー情報室主

遺 伝子組み換えGM作物を主にアフリカに売り込むための動きが、さらに活発になっている。その資金を提供しているのが、Windowsで大儲けしたビル・ゲイツ夫妻が設立したビル&メリンダ・ゲイツ財団である。

ビル&メリンダ・ゲイツ財団の資金提供先

ビル&メリンダ・ゲイツ財団が、GM作物をアフリカに売り込むための新たな戦略が示された。アフリカの53ヶ国・地域が参加する世界最大の地域機関であるアフリカ連合が設立した、バイオテクノロジーの専門家養成機関であるアフリカ・バイオセーフティ・ネットワークに資金を提供することで、ある。GM作物を導入するためには、各国に生物多様性条約・カルタヘナ議定書に基づくバイオセーフティ法を導入させる必要がある。しかし、この法律が厳しい規制をもたらすと、逆に導入の障害物になりかねない。そのため



アフリカ連合加盟国

緩やかな規制にするよう規制当局にバイオテクノロジーの専門家を配置させる必要がある。その専門家養成の機関に資金を提供して、GM作物導入の道筋をつけようというものだ。

ビル&メリンダ・ゲイツ財団の資金の提供を受けて、サハラ以南のアフリカに大規模な「遺伝子革命」を進めようとしているのが、米国アイオワ州立大学とケニア・ナイロビ大学の研究者による共同チームである。かつて進められた高収量品種の売り込みを「緑の革命」と言っていたが、GM作物の売り込みをその「緑の革命」になぞらえて「遺伝子革命」と呼んでいる。その緑の革命の名前を持つAGRA（アフリカ緑の革命連盟）の支援を受けて、両大学研究者は、アフリカに導入するGM作物開発を進めている。このAGRAに

も、ビル&メリンダ・ゲイツ財団が資金を提供している。

アフリカを取り巻く「遺伝子革命」

このような動きに対抗して、アフリカ諸国の間で反発も強まっている。まずは、ガーナ政府がGM食品輸入規制法案を閣議決定した。ジンバブエ政府も、GM作物の近隣諸国からの流入を防ぐために、国境に検査官を配備することになった。ケニアの場合、3年もの間、4種類のGMトウモロコシが食卓に登場していたことが判明した。2008年より総計で3万トンが南アフリカから入っていたのである。このことに、環境保護団体などが抗議をおこない、ケニア政府も南アフリカからのトウモロコシの輸入を止めた。

GM作物をめぐる動きは、いま、アフリカが主戦場になった感がある。もともとアフリカは、歴史的にヨーロッパ諸国とつながりが深い国が多く、GM作物に消極的なヨーロッパ諸国への作物輸出に差し障りが出るとして、GM作物導入に消極的だった。それがこの間、米国への傾斜が強めるなど大きく変化している。

蓄積される負の遺産

その推進役の米国では、GM作物は

黒っぽいものをよけながら、きれいな赤色のチェリーを選ばなくてはいけない。肩から提げたポテと呼ばれるカゴは、摘んだチェリーがたまるにつれて当然重みを増す。首・肩・腕にはあつという間に疲れがたまってきた。さらに、枝をひっぱったときにバラバラと降ってくるゴミ（直射日光に弱いコーヒーの木を強い日差しから守る大切なシェードツリーの落ち葉）が目に入り涙がこぼれる。不安定な斜面で1本の木から別の木へと移動するのも、慣れない私には一苦労だ。……と四苦八苦しながらも、夕方までの6時間以上、昼ごはん休憩をのぞいては休むことなくチェリーの収穫を続けた。

とはいえ、ただ大変でキツイだけの肉体労働というわけではなかった。仕事の手を止めることは決してなくとも、歌をうたったり、おしゃべりをしたり、叫び声をあげて遠くにいる仲間と交信（？）したり、おとも子どもも楽しみながら働いている。こうやって収穫されたエラウロ村のコーヒー豆、もうすぐ海を渡って日本にやってくるのが楽しみだ。■

（注）オルター・トレード・ティモール社（A.T.T.）…東ティモールにおける人びとの自立した持続可能な暮らしづくりをめざした事業を展開している。コーヒーの買い付け、輸送以外にも、地域内流通や食品加工も進めている。

厄介者になりつつある。現在、遺伝子組み換え（GM）作物は、除草剤耐性作物と殺虫性作物の2種類が作付されている。除草剤耐性作物は、ラウンドアップのような植物をすべて枯らす除草剤に耐性を持たせた作物で、それによって除草剤を散布すると、作物以外のすべての植物を枯らすことができる。もうひとつの殺虫性作物は、作物自体に殺虫毒を生産させ、害虫が作物につくと死ぬようにしたものであり、殺虫剤を撒かなくてすむ。どちらも省力化・コストダウンになるという性質のものだ。

その省力化・コストダウンをもたらす効果に問題が生じたのだ。除草剤耐性作物では、除草剤耐性雑草がはびこり、殺虫性作物では、殺虫毒素耐性害虫がはびこり、ほかの農薬を使わざるを得なくなり、効果が減じただけでなく、マイナスに転じ始めたのである。特に除草剤耐性雑草が増大し、除草剤の消費量が増え続け、深刻な環境汚染や経済性の低下が問題になっている。

多数の研究が、GM作物が負の遺産を蓄積し続けていることを報告しており、米国でだめなものをアフリカに売り込んでいく実態が浮かび上がってきた。■

このコーナーは「KAJA」のメンバーの方たちに交代で書いていただいています。

03

まだまだ 韓流



『不滅の李舜臣(イ・スンシン)』
販売元：衛エプロット

原作の長編歴史小説「孤将」は蓮池薫氏が翻訳、DVDシリーズは現在発売中。

「不滅の李舜臣(イ・スンシン)」は、蓮池薫氏の翻訳、DVDシリーズは現在発売中。原作の長編歴史小説「孤将」は蓮池薫氏が翻訳、DVDシリーズは現在発売中。

04

中島 恵 / なかじま・けい
KAJA (Korea And Japan Alternative learning group) 会員

韓国史上最高の英雄の生涯を描いた『不滅の李舜臣』

今回は韓国で大ヒットした大時代劇『不滅の李舜臣』(2004年、KBS、全104話)をご紹介します。これまで高句麗の王を描いた大作『チュモン』や、ヘ・ヨンジュン主演の『太王四神記』など、日本でも韓国時代劇は数本紹介されてきましたが、これは最も人気を博した作品のひとつといえるでしょう。

04

Have you ever seen the Cinema? あの映画を見たかい?

『長江哀歌』(2006年、中国)
【監督】ジャ・ジャンクー 【出演】チャオ・タオ、ハン・サンミン



『長江哀歌(エレジー)』
販売元：バンダイビジュアル
価格：5,250円(税込)

「長江哀歌(エレジー)」は、バンダイビジュアルから発売されている。この映画は、中国各地で頻りに発生している大規模な洪水災害の原因、つまり人災であるとの説がある。そうした災害の直撃を受け、真っ先に犠牲となるのもまた市井に生きる人びとである。

重政 栄一郎 / しげまさ・えいいちろう
エディトリアル・デザイナー

死にゆく街に生きる人びと...

長江中流域の景勝地、三峡。そのほとりの古都、奉節。二千年の歴史を誇る大きな都市であるが、着々と建造が進められている三峡ダムにより、街ごとその水底に沈みつつある。徐々に、しかし確実に進む水位の上昇とともに住民は生活の場を奪われ、移住を余儀なくされる。街は常に耳をつんざく騒音に包まれているが、それは建造物の解体・破壊工事によるもの。当然にもそこに新たな建物やインフラが計画・建設されることはない。この街は死を宣告された。その運命から逃れる方途はもはやどこにも残されていないのである。長江下流から奉節をつなぐ船に乗って一人の男がこの地に降り立つ。彼は16年前に生き別れとなった妻を捜すためにこの街にやってきた。また一人の女。この街に働きに出たがその後2年もの間行方知れずとなくなっている夫を捜すために訪れた。二人はこの死にゆく街をさまよう。

01

しらたか 更り 04



最上川の河原。

しらたかの会の商品が買えます。お問合せ先0238・85・5675(めぐり屋内)

「最初は子どもたちから練習。目をつぶって。白い石を見つめる」「次は『明日』という感じの石。これと同じことを保護者にもやってもらおう。『ええー』みんな素直な反応だ。『父ちゃん母ちゃんって思う石』『自分っていう石』皆とんぱん慣れだ。子どもたちは石を探し始めた。拾っては置き捨てる。ゆっくり歩いて石たちを見つめ続ける。連立って歩く子はいない。みんなひとりだった。子どもたちは綺麗だった。歩く姿も立ち止まって石を見つめる姿も。かがんだ姿も親にそっと手渡す姿も。石の中には何かあったんだべ。古に触れ合っており石の文

紺野信吾 / こんの・しんご
身体教育家

古の「ミニユニケーション」・石文体験

02

むらを歩く 10

大野和興 / おおの・かずお
農業ジャーナリスト、本誌編集長



狙われるニワトリたち。

「けもの追われる山間地農業」Nさんが埼玉県秩父郡の山間地の集落に居を構え、農業を始めて10年になる。定年をあと何年か残して職場を離れ、移り住んだ。ニワトリを飼い、野菜を作って、年金プラスアルファの暮らしを送っている。そのNさんの暮らしに異変が起こったのは今年の初夏のことだった。飼っていたニワトリがタヌキやキツネに襲われ、ほぼ全滅してしまったのだ。Nさんの養鶏はまったくの自然養鶏で、最も多く飼っていたときに160羽しかいなかった。それが次々とやられ、7月半ばには5羽に落ちてしまったのだ。考えられる手はすべて打ったが、けものたちは徐々に慣れて、効かなくなる。犬も飼ったが老齢で死んでしまった。それでもけもの番をやめるわけにはいかなかった。Nさんは、けもの被害がこれほど広がった理由はいらぬあるが、耕作放棄地や遊休農地が増え、灌木や草が生い茂っている土地が人家の近くに増えたことが大きな原因だと話している。高齢化で耕作を放棄せざるを得ない土地が増え、それでも頑張っている農民の土地をけものや鳥が襲う。その結果また耕作放棄地が増える。いま各地でそんな悪循環が広がっている。

けもの追われる山間地農業

今回のお題

コーヒー
焙煎ロースター・
コーヒーモルティブ下北沢さん

レポーター
吉澤真満子 / よしざわ・まみこ
APLA事務局長



『コーヒーモルティブ下北沢』代表の
和南城保さん

今 回のAPLA生活は、実際に
お店に足を運び、(株)オルタ
ー・トレード・ジャパン(ATJ)のコ
ーヒー生豆を取り扱ってくださって
いるコーヒーモルティブ下北沢さん
にお邪魔しました。小田急線・下北
沢駅南口を出て、商店街を歩いてち
よつとすると、左側から香ばしい匂
いがただよってきます。それにつら

また、このフェアトレードのコー
ヒーと出会ったことがきっかけで、
生産者を応援したいと、関連記事や
雑誌などで勉強もされたということ
です。そのなかで感じることは、子
どもの教育の重要性。暮らしをよく
するにはどうしたらよいか、いいも
のを作ればそれだけ自分たちの生活
に反映される、こうした向上心は教
育から生まれてくるもの。こうい
うなかからフェアトレードの精神が育

あることを知り、コーヒーが似合
う町・下北沢にお店を出されました。
コーヒーの味は焙煎やその後の酸化
状態により変化するもの。大手の流
通では、なかなか細かい部分まで調
整することが難しく、それが味に影
響してしまふ。しかし、本当におい
しいコーヒーを楽しんでもらうため
お店では、焙煎したての新鮮な豆を
お客様にお届けすることにこだわっ
てきたといいます。

「やっぱり、おいしいものを飲ん
でほしい。そういう気持ちで、毎回
焙煎しています。それでも、こ
れは、いい！と自分が納得できる焙
煎はそんなに多くはないんですよ」
生産者が大切に作った豆を、一番
いい形でお客様に届けたいという、
焙煎人、和南城さんの思いにふれ
ました。「全ての人とつながりがあ
つてのこと。お互いに思いあう気持
ちが大切だと思っている」その和南
城さんの気持ちが、コーヒーを通じ
て生産者やコーヒーを飲む人へとつ
ながっているのでしょうか。「実際に
生産者のところを訪れるのが、最後
の仕事だと思っています」いつか和
南城さんが産地を訪れることがあ
つたら、生産者たちも喜ぶことだろ
うな、と思いを馳せながらお店を後
にしました。

『焙煎ロースター・コーヒーモルティブ下北沢』
東京都世田谷区北沢2-14-7 セントラルビル1F 楽天(ネットショップ): <http://www.rakuten.co.jp/maldive/>

ペルーコーヒーの出会い

1984年から下北沢でコーヒ
ー焙煎のお店を始めた和南城さん。
ATJのコーヒーと出会ったのは
2000年のこと。当時のATJコ
ーヒー担当者が、飛び込みでペルー
の豆を持っていったのが始まりでし
た。既に店には別の有機栽培の豆も
ありましたが、こんなにおいしい豆
があったとは！と、早速ペルーの取
り扱いを始めてくれました(その後、
他の生豆も取り扱ってくださってい
ます)。

社と比べると、
フェアトレードの豆は、品質管理や
安定供給というところで、まだまだ
頑張れるところがあると思うので、
今後の更なる頑張りを目指したい」
というコメントもいただきました。



お店に入ってすぐ左にある焙煎機。毎回毎回、
丁寧に焙煎する和南城さん。



お店には、各種焙煎した豆が並ぶ。それぞれの
豆には、その特徴が書かれた説明がついている。



| | |
|---|---|
| 1 | 3 |
| 2 | 5 |

- 3年前に初めて石垣島を訪れた際、ふと買い物で立ち寄った
お店。ジーマミー豆腐やサーターアンダギーをオマケしてくれ
るなど、非常に親切にもらった事が縁で、その後も毎年
必ず訪れている。写真付きで手紙まで書いたのに、会うたび
に忘れており、毎年同じ説明をする羽目になるのもご愛嬌！
(石垣島、2010年8月)
- 地盤の安定しない場所で幹を支えるために、板根と呼ばれる
根を張り巡らす植物。樹齢400年と言われ、一生懸命生きて
きた様子が伝わってくる。昔はこの板根を、船の櫂やまな板
に利用していたとのこと。(西表島、2010年8月)
- 島を自転車一周していると、至る所でヤギに出くわす。大
抵はつながれているが、稀に野生化したものもいるそう。最

最終的には食用として出荷されるらしい。試しに鳴き真似をし
てコミュニケーションを取ろうとしたら、本当に鳴き声で返して
くれた。(波照間島、2009年8月)

- 日に数便の船が出港した時の様子。島の人もそうでない人も、
皆で手を振って見送っていた。島に行くとき、こういう風景が
毎日繰り返されるのだろうか。些細なことだが、非常に人間らし
い営みだと思う。(鳩間島、2010年8月)

- 道路をのんびり横断中の天然記念物のヤマルハコガメ。思わ
ず「危ない！」と言いたところだが、先住していたのは彼ら
であり、ましてや余所者である我々には、そんなことを言える
資格はない。無事に渡り終えるのを見届けて、お別れした。
(西表島、2010年8月)

このコーナーでは皆様の写真を募集しています。

募集内容◎アジアを旅した写真5枚程度(日本も含まず) 詳しくはAPLA/あぶら事務局(TEL:03-5273-8160)までお問い合わせください。皆様からの応募をお待ちしております！

【事務局だより】

編集後記

今号は「成長」について考える特集です。経済が成長して、本当にみんな幸せになったのが、もっと違った道はなかったのか。「成長戦略」が声高に主張される一方で、そんな疑問が人びとの間で広がっています。それは「脱成長」という表現で整理されようとしています。理論とくらしの現場の双方から「脱成長」を検証しました。(大野)

現在、生物多様性条約会議が行われている。本来は人間も生物多様性の中のひとつで、自然の一部としてあり、人間の中にも自然が息づいていたのではないかと思う。近代化に伴い、生活は便利になり、自然と分断され、人間の中に備わっていた自然と共鳴する本能がどんどん失われ、自己中心的になったのではないか。そんな状況に時々悲観的になってしまうが、「しらかべ便り」の石文体験の様子を読み、まだそんな力が人間にも残っているのかも、どううれしくなった。(吉澤)

夏～秋は仕事や私事で人の多い場所に出かけることが多く、それと比例して出会いも多い季節となりました。このつながりをこれっきりとせざるに継続させていくためには、実生活に組み込んでしまうのが一番。APLAとして個人として、ここを起点にどんな未来図が描けるだろうとモヤモヤ考えています。(松田)

ハリナ HALINA

2010年秋号 vol.02-no.10
2010年11月1日発行

編集長
大野和興

編集者
吉澤真満子、松田麻衣子

表紙写真
長倉徳生

デザイン・制作
十年舎

編集・発行
特定非営利活動法人APLA
(APLA/あぷら: Alternative Peoples' Linkage in Asia)

〒169-0072
東京都新宿区大久保2-4-15
サンライズ新宿3F
tel. 03-5273-8160
fax. 03-5273-8667
e-mail info@apla.jp
URL http://www.apla.jp

印刷
株式会社セイズ

APLA web siteでは、本誌に掲載されている写真の一部をカラーでご覧いただけます。
http://www.apla.jp/05/05_halina.html

| 事務局の動き(2010年8月～2010年10月) | |
|--------------------------|---|
| 8月 3日 | カカオ・パームオイル研究会・第2回目が開かれました。 |
| 8月 24日 | ATJ・APLA定期協議会が開かれました。 |
| 8月 19日 | 『APLA/あぷら公開講座・農と食を考える』第5回を開催しました。 |
| 8月 27日 | エスコープ大阪で「バナナ学習会&子どもおやつ作り」が開かれ、吉澤が講師を務め、APLAの活動とバナナの民衆交易の話をしてきました。 |
| 8月 27日～9月 2日 | 秋山がネグロスへ出張しました。 |
| 9月 11日 | WE21ジャパン相模原で野川が東ティモールのプロジェクトに関する話をしてきました。 |
| 9月 16日 | 『APLA/あぷら公開講座・農と食を考える』第6回を開催しました。 |
| 9月 17日 | カカオ・パームオイル研究会・第3回が開かれました。 |
| 9月 21日 | WE21相模原でカフェ WIWIでのコーヒーイベントに野川が参加しました。 |
| 9月 25日 | APLA理事会・評議員会開催。 |
| 9月 28日 | ATJ・APLA定期協議会が開かれました。 |
| 9月 30日～10月 7日 | 団体会員であるグリーンコープ共同体の“fromネグロス組合員ツアー”に同行し、フィリピン・ネグロス島とインドネシアを訪問しました(大橋、津留、吉澤同行)。 |
| 10月 1日 | パキスタン洪水被害緊急支援開始(11/25まで) |
| 10月 2日、3日 | グローバルフェスタに参加しました。 |
| 10月 7日 | WE21みなみのコーナーに関するワークショップにAPLA理事廣瀬康代さんと野川が講師として参加し、ワークショップを行いました。 |
| 10月 9日～11日 | 島根県弥栄町を訪ねる旅を開催。 |
| 10月 13日 | トヨタ財団助成金贈呈式に、共同代表村井吉敬さん、吉澤、野川が出席しました。 |
| 10月 14日 | 埼玉県立岩槻北陵高等学校の総合学習の時間で吉澤がバナナについての授業を行いました。 |
| 10月 16日 | 反貧困世直し大集会2010に参加しました。 |
| 10月 17日 | 土と平和の祭典に参加しました。 |
| 10月 21日 | 『APLA/あぷら公開講座・農と食を考える』第7回を開催しました。 |

事務局からお知らせ

トヨタ財団2010年度アジア隣人プログラムの助成内定をいただきました。

「東ティモールのコーヒー産地における持続可能な自給自足型モデル農村づくり～フィリピン(ネグロス島、ルソン島北部)の農民の経験共有をもとに～」というプログラムで、2010年10月より2年間450万円の助成をいただくことになりました。東ティモールとフィリピンの農民交流の費用にあてていきます。

パキスタン洪水被害緊急支援を始めました。皆さまご協力ください。(11月25日まで)

互恵のためのアジア民衆基金の社員団体でもあるNPO法人日本ファイバーリサイクル連帯協議会(JFSA)からの呼びかけを受けて、緊急支援を始めました。JFSA支援先であるスラムの子どもたちの学校であるアルカイルアカデミーが行う緊急支援を応援します。募金のご協力は下記までお願いします!

郵便振替:00190-3-447725 特定非営利活動法人APLA
銀行口座:みずほ銀行高田馬場支店(普通)2650327 特定非営利活動法人APLA
*ご入金の際は、お手数おかけしますが、通信欄に「パキスタン支援」であることを明記していただくか、お電話、メールにて事務局までご一報くださいますようお願いいたします。

APLA公式Twitter (http://twitter.com/_apla_)

事務局スタッフ3人がAPLAの活動・パートナーに関する旬な情報配信に加え、イベントや出張先からあれやこれや、時には他愛も無いこともつぶやいています。お気軽にフォローしてみてください!



グループディスカッションの成果を発表。

参加者からは、「今日のような議論の場が必要か、について考える時間をとりました。ディスカッションの結果をほかの参加者にも共有することは、期待以上に大きな成果を生んだ模様。」

From East Timor【東ティモールより】
経験共有ワークショップを実施、10地域から23人が参加しました。

2010年8月2日、デシリ市内で「コミュニティグループの経験共有ワークショップ」を実施しました。昨年に複数の農村で実施した「農村ワークショップ」の結果を各コミュニティにフィードバックする

き、各グループの活動発表です。コーヒー産地や海沿いの地域など、それぞれの地域性をベースに進めてきた活動があり、関与・支援する団体も異なりますが、そうした点も含めて、各グループの活動の様子に参加者全員に共有されました。どの参加者も、自分たちのコミュニティとの類似点・相違点を探しながら、熱心に耳を傾けていた様子が印象的でした。その発表をもとに、次は活動内容ごとに参加者を4グループに分けてのディスカッション。最後は、各コミュニティ・グループに戻り、いま自分たちのグループがどういう段階にいるのか、「自立」に到達するためには何が必要か、について考える時間をとりました。

From Indonesia【インドネシアより】

ATINA社労働者調査・現地報告会

2009年7～8月、約1ヶ月間、間瀬朋子さんとハルンさんに調査を依頼し、エコシュリンプの加工工場であるATINA

A工場工員さんを中心とした労働者の調査が行われました。この報告書は2009年末にまとめられ、2010年末の出版を目指して現在編集・校正作業を進めています。こうしたなか、2010年7月下旬、間瀬さんとハルンさんが1年ぶりにATINA社を訪れ工員さんたちと再会、間瀬さんの報告書内容を発表する機会を設けました。この報告会は「労働調査報告書内容の確認」と位置づけ、工員さんたちに報告書の内容のポイント(特に工員さんたちの生活・



報告を受けるATINA社の工員さんたち。

意識調査の部分)を伝え、「皆さんどのインタビューをこのようにまとめ、日本の消費者に読んでもらうことになりました」と工員さんたちに伝えました。ATINAの工員さんたちはざつとばらん、闊達に意見表明し、間瀬さんとハルンさんをお互いに話合いたオープンな話し合いの場になりました。

「皆さんと間瀬さんたちのやり取りをご紹介します。「エビ加工作業は疎外労働か?」という項目について、間瀬さんが「毎日エビの殻を剥いたりする作業は退屈ではないですか?」という問いかけに、工員さんたちはきつぱりと「そんなことはありません。わたしたちは責任を感じて仕事をしていますから」という意見が出されました。また、こういったATINA工場の実情をエコシュリンプを食べてくれる消費者の方々に知っていただくことをうれしく思い、是非その反応を教えてください、という要望も出しました。(APLAインドネシアデスク 津留麻子)

は、とても役に立つ。学びあいの機会を今後もたくさんつくってほしい」自分たちが課題として抱えていることへの

アドバイスをもらえて助かった」など、前向きな感想や意見が出されました。今回のワークショップでの経験や知

識の交流・共有が、今後の各グループの活動に有効に生かされることを期待しています。(APLA事務局 野川未央)